

# メゾン「BRUYÈRE」イブニングドレス（1940年代）の解説

——文化学園服飾博物館所蔵ドレス——

伊藤 由美子\* 大 橋 寛 子\*\*

A Commentary on the Maison “BRUYÈRE” Evening Dress (1940's)

——A dress belonging to the Bunka Gakuen Costume Museum——

Yumiko Itou・Hiroko Ohashi

**要 旨** 本学園服飾博物館所蔵品の中で、装飾に優れたオートクチュール仕立てのイブニングドレスを取り上げ、その詳細な記録を残すことを目的とした。方法は、作品の構造、縫製・装飾技法は写真撮影により情報を収集し、実測および立体裁断の手法を用いてパターンを採取、さらにトワルによる再現を行った。結果、構造は、上半身保形のため内側に脇身頃を除く前後身頃の其々ウエストまで5本の金属製ボーンが裏打ち布に留められていた。内ベルトは身頃と裏地との間にあった。縫製技法では、裾の始末に現在の技法との相違点がみられ、折り上げた縫い代の0.5cm奥を千鳥がけで留めていた。装飾は、図案の輪郭を1本糸の鎖縫いミシンで縫われ、大ききの違う5種のラインストーン、4種のパールを巧みに使い分けており、穂の部分は、白の綿糸で隙間なく糸を渡し、その上に長さ2mm弱の管状ビーズで刺繍されていた。パターンは、ウエストより下部に使用した布幅の分量をそのまま生かし、脇身頃に利用していた。今回は、パターン採取とそのフォルムの確認およびドレス構造と技法のみの調査結果に留まった。今後は、これらを踏まえて資料に近い布を使用した実物製作を通しての縫製技法を分析したいと考える。

キーワード パターン（pattern） 縫製方法（A sewing method） 装飾（Decoration）

## I. は じ め に

本学園服飾博物館には、多くの貴重なオートクチュール作品が所蔵されている。それらの作品は、パターンや縫製法について研究されている作品もあるが、まだ分析されていないものも多くある。本研究では、その中のメゾン「BRUYÈRE」が製作したイブニングドレスを取り上げた。第二次世界大戦後の1947年から1987年の40年間、フランスのオートクチュール（仏:haute couture）界は、芸術性の高いモードを生み出した<sup>1)</sup>といわれており、その作品は、同年代である1948年に製作されたもの

で、装飾に関しても伝統的な職人技を駆使した衣装である。一点物の高級服であるため、許容範囲のあるサイズ展開で合理性を追求した縫製法の既製服とは異なり、そのパターンの解明、縫製方法、装飾技法を分析し詳細な解説を残すことは、今後クオリティーの高い服作りに示唆するものとする。

## II. 作品について

作品（図1）は、1948年製作されたイブニングドレスで、掲載写真は、文化学園服飾博物館で撮影されたものである。デザイナーのマリー・ルイーゼ・ブリュイエールは、キャロ姉妹が経営するメゾンで経験を積み1929年に独立した人物である<sup>2)</sup>。彼女は、1944年11月に行われたファッションショーにおいてファッショ

\* 本学准教授 服装造形学

\*\* 本学専任助教 服装造形学

ン雑誌『VOGUE』記載の「さまざまなアイデアが詰まった作品が揃っている」<sup>3)</sup> メゾンの一つに取り上げられるなど当時は評価の高いデザイナーと言える。

ドレスは、表朱子織りで生成色の絹地素材であり、身頃部分を前後2枚のV字形のパネルで構成されている。胸・背・肩を大きく開けた袖なしのベアトップのデザインである。また、身頃の両脇にタック（装飾のため布をつまんで縫ったひだのことを指す）を施し、その部分には、流線形のミシンステッチで身体に沿わせて押さえられている。

装飾は、図案化した麦の穂模様をデザインとし、その穂の輪郭を銀糸のミシンステッチがされ、さらに大小の模造パール・ラインストーンとビーズで刺繍されている。穂の部分は、銀の管状ガラスビーズで埋め尽くし、中綿で盛り上げた立体的な刺し方である。<sup>2)</sup>

### Ⅲ. 研究 方 法

#### 1. 作品の撮影

作品の以下の詳細な情報を得るために、デ

ジタルカメラによる撮影を行う。

- 1) 構造と縫製方法
- 2) 装飾部位

#### 2. 作品の実測

作品の計測は、貴重な所蔵品のためボディの着装ではなく平置き状態でを行い、使用計測器は、テープメジャーと竹製定規とした。資料に触れる際は、木綿の白手袋を着装する。実測にあたり、基準とした線は、前後中心線・バストライン・ウエストラインである。前後中心線は、V字形のパネル身頃の2等分とし、バストラインは、柔らかい紙を内側において仮想着装状態で最大突出部分を基準に前後中心線と直角に交わる水平線とする。ウエストラインは、脇身頃のタック部が止められているミシンステッチ位置を水平線とする。また、装飾による測定誤差を極力なくするため、バスト周りとうエスト周りの2か所については、内周りと外周りを計測する。ヒップラインは、ウエストから下部のシルエットが身体に沿っていないため、設定は困難であると判断し、ヒップ周りの計測は行わない。その他、裾周り寸法は、其々の切り替え



図1 調査作品のイブニングドレス写真（博物館データベース）

位置で計測を行う。

さらに、脇身頃のステッチミシンで押さえられたタックの状態を把握するため、デコルテ（肩から胸、背をあらわにした婦人服の総称）ラインとウエストライン上の其々表タック寸法とその深さ寸法により陰タックの分量を計測する。

### 3. トワルによる再現

実測結果から、まず、1/2縮尺サイズでパターンを作製、右半身の身頃を立体化・検証する。次に、実大のパターンに展開し、表1に示す諸元の布を用いて仮縫製を行う。さらに、ボディに着装させ図1に示した写真との比較検討から再修正を行いパターンの整合性を図る。

## IV. 結果および考察

### 1-1) ドレスの構造および縫製技法について

ドレスの構造と縫製技法は、それらの結果を併せて次に述べる。脇身頃を除く前後身頃の前は上部からウエストより5cm下まで、後ろは全面に表布のシルエットを保たせるために、補強として裏打ちがされている。それは梨地織の布であった。そこには、綿テープ内に納められた10本の金属製1.5cm幅ボーンがウエストラインまでまつり縫いで留められている。その長さはデコルテライン2cm下からの8本と左右のバストポイントからの2本であった（図2）。脇身頃は、タックによって表布が2〜3枚重なり、さらにミシンステッチをかけることで、保形性が充足されているため、裏打ち布がされていないと考えられる。分量の多いウエストより下部を支えるための内ベルトは、3.5cm幅であり、ウエスト位置に、長さ0.7cmの糸ループによって留められている。

裏地は、表地でウエストラインからアンダーバスト付近にかけて付いており、前12.5cm幅か

表 1. トワルの諸元

布地名	材質 (%)	組織	織糸の太さ				糸密度 (本/cm)	厚さ (cm)	硬軟度 (cm)
			t e x		綿番手 (S)				
湯通し薄手シーチング	綿 100	平織り	たて 22.2	よこ 16.2	たて 26.6	よこ 36.6	28 × 28	0.03	たて 5.9 よこ 3.6 右バイアス 4.2 左バイアス 4.2

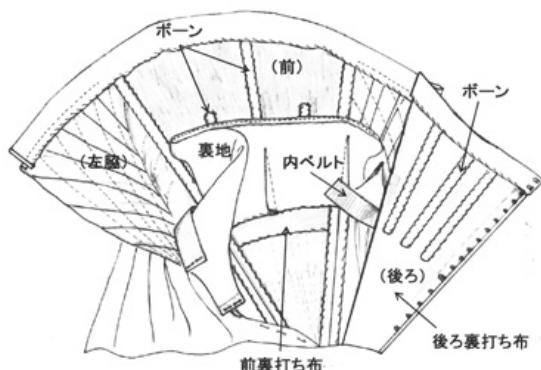


図 2 ドレス内側

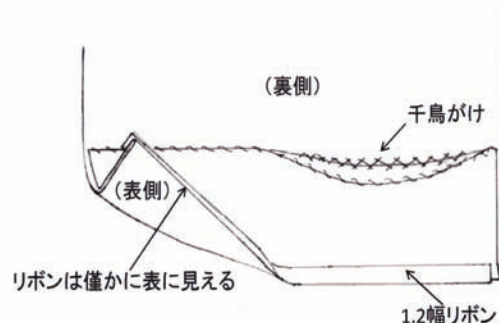


図 3 裾の始末

ら後ろにかけて5.5cm幅であった。その上部の縫い代は、伸びに対しての考慮か0.1cmにミシンステッチされ、身体側に0.5cm幅で折られ千鳥がけ（糸を斜めに交差させながら左から右へ進むかがりの一種）で始末がされていた。裏地の上部は、ドレスの本体には留められていなかった。その下部は、裁ち端を折らず、縫い代のかがりりがされ、内ベルト下部に流しまつりで所々留められていた。ウエストより下部に裏地がないのは、このドレスにアンダースカートまたはパニエがあったためではないかと推察できる。

ドレス着脱のためのあきは、後ろ左側のV字形パネル部分の切り替え線にあり、開閉の留め具は針金製のカギホック18個で、そのうち上部2個とウエスト位置1個は他と比較して大きい物が使用され、着用時に力のかかる部分への考慮が見られた。また、その掛ける側のホックの付け位置は裏打ち布と表布の間に隠され、金具が見えない配慮が認められた。

ウエストより下部は、8枚のパターンの接ぎ合わせとなっている。そのうち6枚は、生地幅を生かし、耳をそのまま利用していた。この耳には、所々0.5cm程度の切り込みが入っていた。現在の洋裁では耳は切り落として使用することが多い。製作当時には、布の裁ち端始末を行うかがり専用のミシンがないため、手作業で裁ち端をかがっていた。その作業は、縫い代の長さと数が多いほど時間を要するため、かがらなく

てよい耳を利用したと考えられる。

裾の始末を図3に示す。その始末は、縫い代の裁ち端をかがり、7cm幅に折り上げられ0.5cm奥を千鳥がけの手法を用いている。現在、この技法は、かがりの糸が見える状態で布の端のほつれを防ぐのに用いられていることが多く、布の奥をまつる技法には用いていない。折山位置の縫い代側に1.2cm幅のサテンリボンがまつり縫いで留め付けられていた。このリボンは僅かであるが裾より表側に見える状態であり、裾が床面に擦れることにより、表布の損傷を防止するために付けられたと考えられる。

### 1-2) 装飾について

前後V字形パネル部分には、刺繍が全面に施されている。文献によると刺繍工房「ルサーージュ」で製作されたと記されていた<sup>2)</sup>。使用されている装飾の材料は、おおよそ管状ビーズ13,000個、ラインストーン2,200個、パール3,350個であった。図案輪郭には「銀糸によるミシンステッチ」<sup>2)</sup>と記されてある。作品の裏面拡大写真（図4）から、そのステッチは、裏面側がチェーンステッチとなる1830年に発明された一本糸の鎖縫いミシン<sup>4)</sup>によるものではないかと判断した。図5は、実際にフランスのメゾン・ルサーージュで使用されていたものであり、それを現在アトリエ「Lemmikko」の柴田士郎氏が譲り受けたミシンである。実際にそのミシンで試し縫いをした裏面側を図6で示す。



図4 刺繍裏面

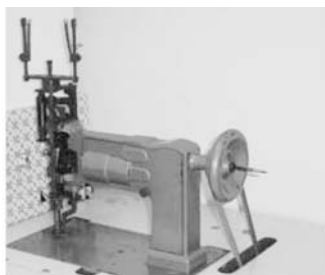


図5 鎖縫いミシン



図6 鎖縫いミシンでの試し縫い(裏面)



図7 図案（穂の部分）



図8 図案（スカラップ部分）



図9 図案（茎の部分）

針目の大きさは違うものの、裏面のチェーンステッチの縫い目は同じであった。

立体的に膨らみをもたせていた穂の部分は、管状ビーズが外れているところの拡大写真により、綿の白糸で図案の中を隙間なく糸を渡している（図7）。図案上部のスカラップ状部分は、つめ金具のついた4種の大きさの違うラインストーンをグラデーションに使用してより丸みを表現していた（図8）。また、5種のパールを使用した刺繍の葉、ラインストーンの茎部分も微妙な大きさを使い分け、徐々に上部に向かって大きくする図案構成で穂の実る様子を表す意図が見られた（図9）。これらにより細部に職人

のこだわりある装飾であることが分かった。

## 2. 実測結果

実測結果は、ドレス全体の回り寸法と寸寸法を表2、V字形パネル部分を図10に示す。

ドレス丈は、前133.5cm、後ろ130.8cmであり、その差は2.7cmで、デコルテラインの後ろ下がり分量が示された。基準と設定した周り寸法は、バストライン外周92.8cm、内周90.4cmで、ウエストライン外周71cm、内周68cmであり、表布に合わせた裏打ち布、内側のベルトなどを重ね、フォルムを保たせる技法による厚みであることがわかる。

表2 実測結果

部位		計測値 (cm)
背丈		39
バスト	外周	92.8
	内周	90.4
ウエスト	外周	71
	内周	68
ドレス丈	前	133.5
	後ろ	130.8
	脇	131.8
見頃丈	前	26.5
	後ろ	23.6
	脇	22
袖周り		868

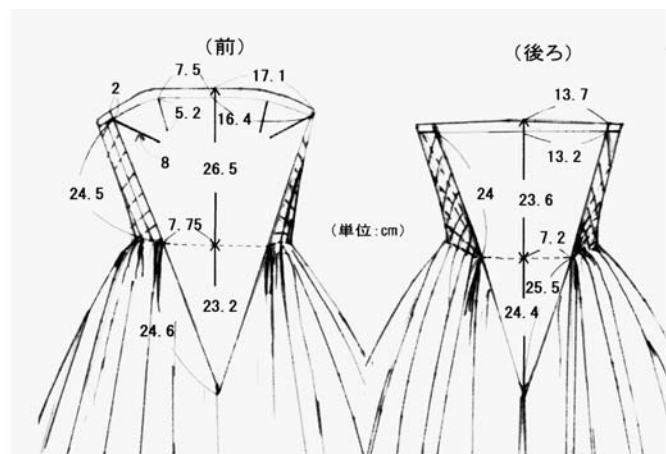


図10 V字形パネル部計測結果



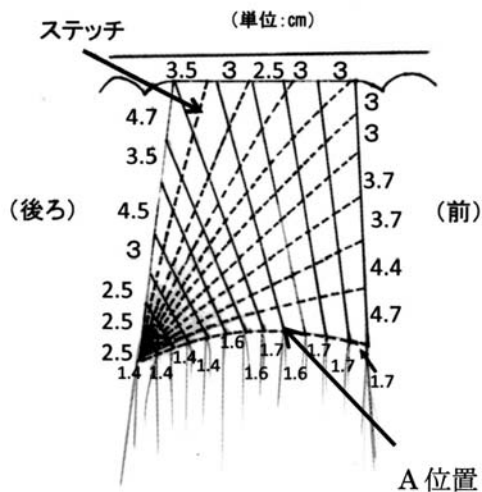


図 11 脇身頃タック部実測結果

前身頃であるV字型パネル部分には、胸のふくらみにあわせたダーツが取られていた。その位置と分量は、バストポイントに向かってデコルテラインより分量1.5cm、長さ5.2cmと袖ぐり側より分量2.5cmの長さ8cmである。また、前中心位置には、ウエストの絞り分量2cm、長さ23cmのウエストダーツの計5本であった。

脇身頃の12本のタックは、前の切り替え線の傾斜に合わせ、ウエストに向かって細くなるように取られている。また、そこには後身頃のV字形パネル部分とウエストラインの交点を基点とし、放射状にタックを押えるミシステッチがかけられている。その形状と実測結果を、図11に示す。そこに示したA部分のミシステッチは、前から後ろにかけて弧を描くように2cm下がっている。このことにより、後ろ下がりのウエストライン設定が明らかになった。また、それらの陰タック分量には差が見られる。

後ろから2本のタック分量は、4cmと5cmで他と比較すると少ない分量であり、逆に前の2本は10cmに取られ、他の8本の分量は、ほぼ8cmであった。結果、タックは規則正しく平面的に折られたのではないことが分かった。さらに、タック始まりの後ろ側には分量7.2cm～8cmで折られた6本のタック（図12）が重なって



図 12 後ろ



図 13 前

おり、また前側には、分量2.2cm・4.4cm・4.6cm 2本・5cmの計5本のタック（図13）が加えられていた。

ドレスの裾周りには、863cmであった。前中心の裾には、ウエストより下部の長さを補うために下から37cm、接ぎ合わせ位置63cm、裾側69.5cmの三角のパターンが追加されていた。

### 3. トワルによる再現

前述の実測結果より、ウエストより下部の切り替線たて地の布目を基準とした想定パターンは、脇ウエストライン位置での実測値と表タックと陰タック分量の合計値とはほぼ一致していた。

この結果から脇身頃は、ウエストより下部の布をそのまま用いたと考えられた。そこで、1/2で想定パターンを作製し、ボディに沿わせながら立体裁断で脇のタックの折り山線を求め、パターンを採取した。次に実大パターンに

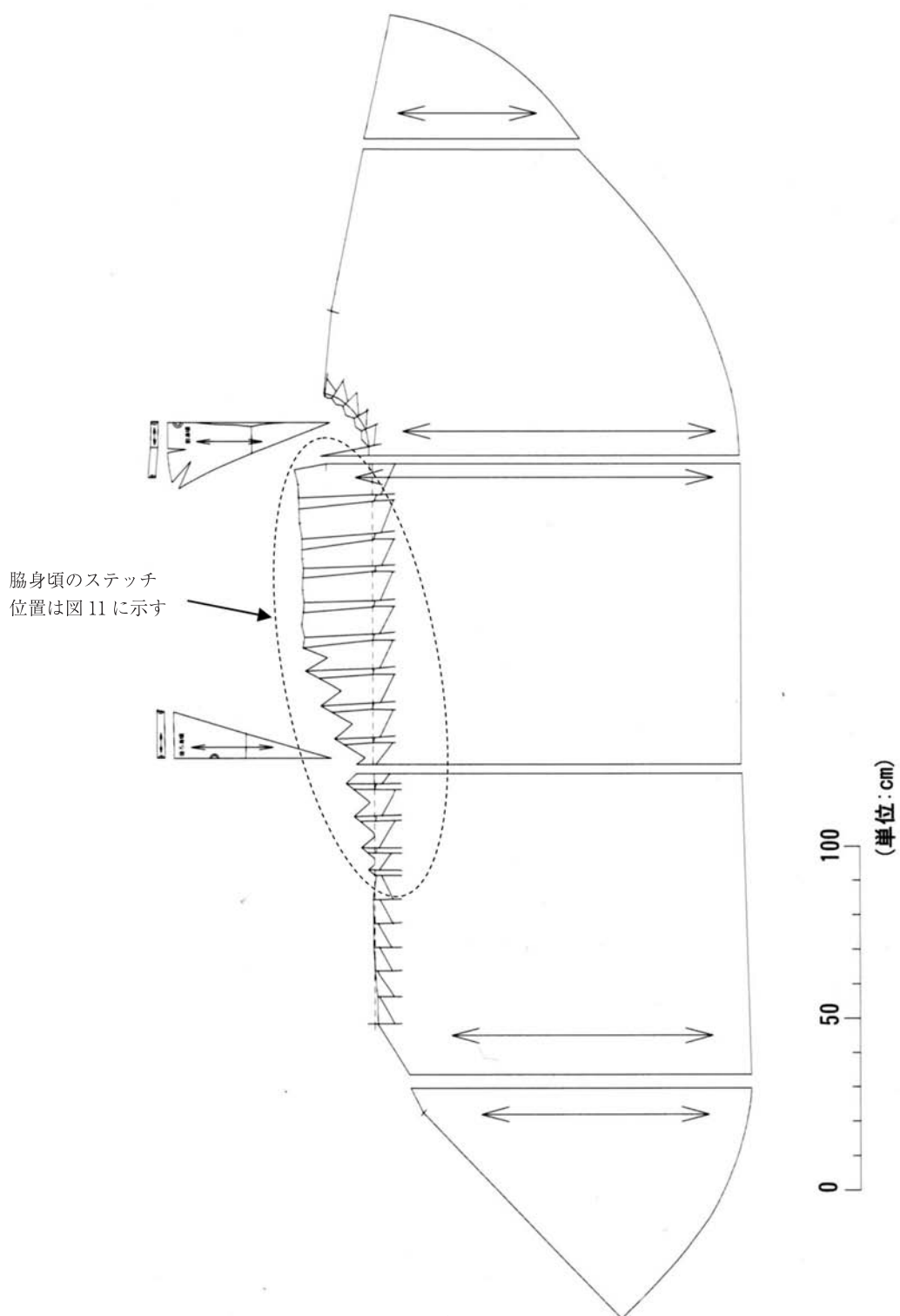


図 14 パターン



図 15 トワル再現

展開，トワルによる仮縫製で再現したものと図1の写真との比較検討を行った。結果，前面V字形パネルの傾斜に合わせた表タック折山の布目方向とウエスト位置から下部のつながりに合わなかったため，前中心から裾に向かうフレアの表情に差が見られた。そこで再度，脇身頃のタックの傾斜角度を変え，ウエストより裾に向かって垂直に美しいドレープが出るように配慮しながらボディ脇の曲線に合わせ，12本のタック折山線を立体裁断で検討した。結果最終のパターンを図14に示す。途中経過のパターンについては，紙面上の都合により今回は割愛する。

トワルによる再現は，図15のとおりである。着用状況は，図1作品写真の撮影時と同じように，仮パニエを履かせた状態にボディ補正を施してある。比較すると布の違いによるウエスト位置のタックの広がり方に差が見られたが，その流れと分量感およびシルエットは，ほぼ近い形で再現された。

前述の実測結果および着装させた状態から，

ドレス着用者の身体は，身長約160cm前後，背丈38cm，バスト90cm，ウエスト68cmではないかと考えられた。

## V. ま と め

本学服飾博物館所蔵のイブニングドレスの詳細な解説を目的として，写真撮影によるドレス構造，縫製技法と装飾技法の情報収集および実測によるパターン採取を行いトワルによる再現を行った。結果は以下の通りである。

### ① デザイン

脇身頃には立体的に身体に沿わせたタックが折られ，身頃の保形とデザインを兼ねた美しい放射線状のミシンステッチがウエストラインまで施されていた。その下のウエストより下部はソフトプリーツで裾に広がりのあるシルエットを表現するため後ろに6本と前に5本のタックが追加されていた。

### ② 装飾

装飾は，図案輪郭に銀糸で一本糸の鎖縫いミ



シンがされ、刺繍は、極小管状ビーズとつめ金具のついた大きさの違う5種のラインストーンと4種のパールを使い分け、麦の穂が実る様子を巧みに表現していた。

### ③ 実測

基準と設定した周り寸法は、バストライン外周92.8cm、内周90.4cmで、ウエストライン外周71cm、内周68cmと差が見られ、表布に合わせた裏打ち布、ウエスト部の内ベルト布などを重ねたフォルムを保たせる技法による厚みであった。実測結果とトワル再現より着用者の身体特徴は、身長約160cm前後、背丈38cm、バスト90cm、ウエスト68cmと判断できた。

### ④ パターン

前身頃には、トップバスト方向に左右其々2本のダーツがとられ、ウエストの絞りを出すためのバストライン方向とヒップラインに向かうダーツが前中心にあり、そのダーツ線は装飾部分にきれいに隠れていた。

脇身頃は、ウエストより下部からの布をそのまま用いて、立体裁断による身体に合わせたタックが取られていた。その分量は、平面的に均一に重ねたものではなかった。

ウエストより下部は、90cmの布を利用した6枚と後ろに分量感を出すための三角形の 패턴2枚、さらに、前中心裾には丈の不足を補う布が追加されていた。

### ⑤ ドレス内側の構造および技法

裏打ちの布は、身頃V字形パネル部分の前は、ウエストより下3cmまでと後ろ全面に当てられていた。しかし、タックにより表布の重なりのある脇部分には裏打ちはなされていなかった。

裏地は、表地と同じ布を用いて前幅12.5cm、後ろ幅5.5cmの胴囲部分のみであった。ウエストより下部に裏布がないことから、このドレスには、アンダースカートもしくはパニエがあったのではないかと考えられる。

内ベルトは、表ドレスと裏地の間にあり、ベルト上部を裏地にまつられ、糸ループにより留め付けられていた。

身頃のフォルムを支えるボーンは、金属製で脇身頃を除く前後V字形パネル部分に其々5本使用されていた。それらは、ウエストまでの長さで綿テープに包まれており、裏打ち布にまつり縫いで留め付けられていた。

縫い代の裁ち端は、裁ち目かがりで、織布の耳の使用部は0.5mm程度の斜め方向に切り込みが入っていた。裾の始末は、現在の技法との相違点がみられ、折り上げた縫い代の奥を千鳥がけで留め付けていた。また、その縫い代折山には、1.2cm幅のサテンリボンが僅かに出るようにまつり縫いで付けられており、裾の折山の損傷を避けるためと考えられた。

後ろあきのカギホックは、かける側ホックの留め付け位置を表布と裏打ち布の間に入れてあり、極力金具が見えないような配慮がなされていた。

以上から、調査イブニングドレスは、贅沢に使用した布を余すことなく利用し、ウエストより下部の分量を上半身で処理するために、脇身頃でタックとして布を重ねて、保形性を兼ねるなどの工夫を凝らしたデザインであった。縫製は手仕事を中心であることが分かった。また、装飾には、大小のビーズ・パールなどを使い分け、精巧な刺繍がされ、オートクチュール装飾の職人技が確認できた。

今回は、パターン採取とそのフォルムの確認およびドレス構造と技法のみの調査結果に留まった。今後は、これらを踏まえて資料に近い布を使用した実物製作を通しての縫製技法をさらに分析したいと考える。

最後に本研究をまとめるにあたりご協力いただきました文化学園服飾博物館の小宮真喜子氏、ならびに装飾調査にあたりご協力いただいた『Lemmikko』の柴田士郎氏、小川明子氏に厚く御礼申し上げます。

### 引用・参考文献

- 1) 『華麗なるオートクチュール展』図録：朝日新聞社 1991年
- 2) 『世界の刺繍』：文化服飾博物館、文化出版

p. 73

- 3) リンダ・ワトソン著 桜井真砂美訳：  
『ヴォーグ・ファッション100年史』，ブルース・インターアクションズ，2009，p. 68.
- 4) 佐々井啓：『ファッションの歴史—西洋服飾史—』，（株）朝倉書房，2003
- 5) 成瀬信子：『基礎被服材料学』 文化出版局

2003年

- 6) 文化女子大学被服構成学研究室編：被服構成学技術編 I，文化女子大学教科書出版部，1985
- 7) 監修 大沼淳 萩村昭典 深井晃子：  
『ファッション辞典』，文化出版局，1999